

# 全自者協ニュース (仮称)

- ・全自者協ニュース/創刊号/1991年(平成3年)10月24日
- ・発行所=全国自閉症者施設連絡協議会・事務局 ☎ 0593-94-1595
- ・発行人=石丸晃子 ・編集人=中塚博勝

## 会報発刊にあたって

全国自閉症者施設連絡協議会 会長 石丸 晃子

丁度この原稿を書こうとしている時、三気の里の土井先生から全自者協会会長宛に「松光学園援助のお願い」という文書が送られてきました。島原市の自閉症者の親たちが資金を出し合い、平成三年度中に認可着工の青写真が出来上がっていた社会福祉法人光和会・通所更生施設松光学園が雲仙岳噴火の影響で着工の目途がたたなくなっただけで、保護者の生活も災害のため家を失った方11家族以上、収入が50%を切る方も出てきているとのこと、自閉症者を連れての避難生活「在宅の自閉症児・者とその家族は想像を絶する生活をしています」の文字が強烈な衝撃で目に飛び込んできました。自閉症児・者を身近にご存知の皆様には、この一行に圧縮された困難の状況が一瞬してご了解いただけることでしょう。この一枚の文書は、自閉症児・者の抱える根本の問題とその対応の貧困さの象徴に思えます。日頃レスパイトケア、緊急一時保護など地域対策として在宅者援助の必要を痛感しながらも、私どもでは手不足、場所不足も含めて現在は実現不可能な状態です。

戦争に巻き込まれたらこの子たちは生きていられるだろうか、難民の中に自閉の子はいないのだろうか、世界のニュースを見ながらよく思うことですが、遠いどこかの国のことではなく、現実には平和で繁栄の社会であっても、競争に弱く、効率が悪く、集団からはずれがちな自閉の人達には大変生きにくい世の中です。まして不時の災害に遭遇などすれば、まさに想像を絶する状況にすぐ追込まれてしまいます。

障害者の「完全参加と平等」を訴えた「国際障害者年」から十年たちました。自閉症の人たちも当然望んでいるに違いない、社会の一員として生き甲斐のある生活を支える場として、法にない自閉症成人施設が名乗り出たのも同じ年でした。そしてこの十年の間に30余もの自閉症者の施設が開設し、運営上非常に困難を予測しながらなお開設の準備が各地で進められていると聞きます。この事実は最近の障害種別を認めないとする国の福祉の動向の中で、必要度・緊急度とも決して看過出来ない障害者自身からの重要な課題提起として受止めるべきではないでしょうか。

当協議会も今年は第五回大会をいずみ学園で開催することになりました。発足以来どの大会も充実した内容で、準備する主管施設も、参加する会員施設も勤務条件の厳しさの中からよくこれほどのエネルギーを！と感動してまいりました。

ノーマライゼーションの理念を進めていく中での施設の役割として、自閉症者が個性豊かに社会で生きる力をつけるための専門性や、一貫性のある生涯の援助システムの計画、障害をよく知ることにより、私たちの「目にみえない意識の壁」を崩していく必要性などこれからも具体的なテーマで、実践を通して、交流の場で深められていくことでしょう。

一方この先駆的な事業を支えている各施設の運営の状況は深刻です。実態を詳らかにし問題点を明確にして、自閉症者施設法制化実現に向けて積極的に取り組む必要を痛感しています。引続き実態調査を実施いたします。ご意見をお寄せください。会員施設ならびに関連施設各位のご協力を心よりお願いいたします。

さて発会の時から毎年事業計画に挙げられていた会報が、嬉しくも発刊の運びとなりました。この会の創設に大変なご苦勞を頂いた初代会長故武村一郎先生に第一号をお目通しいただけないのが本当に残念です。前会長石井哲夫先生はご多忙の中にもかかわらず、この会の育成発展に存分の力を注いでくださいました。今後も引続きのご指導をお願いしております。日本自閉症協会はもとより、関係諸機関との連絡も広がり、会員施設も多数となった今日、会報の発行はこの会の目的を一層明かにし、相互の交流を深めるのに大きな役割を果たすでしょう。企画のご意見・投稿など、どんどん寄せて頂いて活用してください。

雲仙岳災害地援助依頼の文書は「自閉症児・者のために祈って頂くだけでも幸いです」と結んでありました。第五回大会のテーマ彼等の「生き甲斐」のある人生を、私たちは共に求め、共に歩み、祈りを実現のものにしていかなければなりません。社会のありようを鋭く問い続ける自閉症の人たちが、地域の一員として普通の人と同じように暮らせるために努力して参りましょう。以上会報発刊にあたりご挨拶とさせていただきます。

## 自閉症者への社会動向

日本社会事業大学 石井 哲夫

全国自閉症者施設連絡協議会の日頃の活動に共感しその活動を援助するために考え実践してきた事を延べてみたい。自閉症児が幼少期の頃は、その言動が奇矯の為社会的な非難の注目が集まり易いが、成長してきて少し目立たなくなるとその対策が叫ばれなくなってくる。と、いって、その非社会的心理状況が大幅に改善された訳では無い。ただ少しばかり精神的に安定し行動がパターン化したにすぎない。多くの親は困り少数の奇特な理解者と共にそのための社会福祉施設を作ろうとし、やむなく現在の法制度の基で精神薄弱者更生施設を利用している。人間関係が少しでもわかり集団行動がとれる精神薄弱者が集団生活を営む場合とそうでない自閉症者が多く生活する施設とは、まるでその様相が変わってしまう。しかし世の中は、このことについての認識が極めて浅い。いくら声を大にして訴えても自閉症者施設構想は浮かび上がってこない。勿論会長を先

頭にたてて、必要な条件を獲得して行くために要求していく事が大切であって、これを否定するものではないが、今日の我国の社会福祉情勢で、新しい施設構想は、なかなか実現し得ないのである。そこで少し角度を変えて私なりにこの数年にわたって、考えて実行してきた事を紹介しておきたい。

○日本自閉症者協会との関係  
私は、全国自閉症者施設連絡協議会の副会長でもあり、かつ日本自閉症協会の施設部会長でもあってこの二つの団体のつなぎ役と想っている。日本自閉症協会の施設部会長を引き受けて、その部会委員の選定に当たっては、私の意見として石丸現全国自閉症者施設連絡協議会長と大野日本自閉症協会常務理事と東海大学山崎晃資教授をあげて更に顧問として中沢厚生省児童家庭局専門官をお願いしたいという意向を出し承認された。

山崎教授は、日本自閉症協会の研究部会長でもあり、大野氏や私と共に総務委員でもあるので、ここ

で更に強力な両団体の関係が組織的に出来てきたと考えられよう。今施設部会として考えている事は、社会福祉施設にわが子を預けている親の集まりを行いたいという事である。そして社会福祉施設と関係を持ちながら自閉症児者の援助施策や社会福祉施設の発展改善に資する事が出来ればという事である。日本自閉症協会としては、当然ながらその母胎としての親の会の活動を当面継承していく事になる。また将来的には、日本自閉症協会としては、全国自閉症者施設連絡協議会をはじめ全自閉症児者の為の福祉、教育、労働などの関係者を網羅していく事になる。当面はそれぞれの団体が独自性を持って活動していく事になるが常に大同団結の気持ちを持って、自閉症という困難な発達障害児者の発達や生活の改善に尽力していく事が大切であろう。例えば、日の当たらない小規模通所や更生や授産の施設の問題や連携が求められている教育関係などにも手を広げて行かなければならないであろう。

○政策、研究、研修をめぐる状況  
既に報告した私が主任研究者となっている厚生省の心身障害研究

である「強度行動障害に関する研究」については、昨年度に引き続き、自閉症児者施設をはじめとして精神薄弱児者施設や、重症心身障害児施設や養護学校に対する実情調査を行う事になっている。その他委員からの個別な研究も進められるし、特に事例研究も活発に行われる事になる。

次にこれは誤解もされかけた事であるが何としてもこの辺で行動障害を政策に乗せ、且つ国内世論を起こすために、普段から意志疎通のできている日本愛護協会会長であり重症児協会の会長でもある江草氏や全国精神薄弱者育成会理事長の皆川氏や重症心身障害児を守る会会長の北浦氏などと語り合いこれと日本自閉症協会の三宅、山崎両氏とそれに本全国自閉症者施設連絡協議会から石丸会長と副会長の私とがでて「発達障害児者連絡協議会」（仮称）を発足させ強度行動障害に関する政策立案と処遇実践の運動を始める事になったのである。これだけの団体が集まれば厚生省としても気を使ってくださるわけでご承知のように平成四年度の予算要求の中にとりあえず全国で四方所の治療施設を現在の施設を利用してつくるという厚

厚生省原案となってきたのである。この結果は十二月から一月にかけての大蔵省の予算査定によってきまる事になるが、これを機会にこの発達障害児者連絡協議会として多少現場に向けての研修に力をいれて行きたいと考えているわけである。このような関係団体の足並みを揃える事によって当然強度行動障害の多い自閉症者施設の存在もクローズアップされる事になるのである。

更に今年、日本自閉症協会の山崎研究部会長が、三菱財団よりの研究助成を受ける事が出来た。この研究助成は、三菱財団として日本自閉症協会の自閉症福祉の仕事を活性化するための助成と考えられる事が出来よう。その意味で審査委員である私も加わって、全国自閉症者施設も併せてこれに関係する事が望ましいと思っている。今のところ早期発見と早期療育班(山崎担当) 思春期精神病様症状を呈する年長児者班(石井担当)に分かれて計画をたてて実践していく予定である。

以上のような状況を報告して、本会の今後の活動を検討して戴きたいとおもっているのである。

## 十亀史郎講演集(Ⅰ)の 発刊を祝う

いすみ学園 土肥 豊

わが国における自閉症療育の先駆的役割を果たされた故十亀史郎先生のご逝去より早くも六年の歳月が流れたが、このたび十亀記念事業委員会の方々の大変なご努力によって先生の講演集が刊行されたことは、先の追悼集に次いで一日も早く刊行されることを待ち望んでいた私にとってまことに嬉しい限りであった。刊行にあたっての関係各位のご熱意とご努力には本当に頭の下がる思いであり、心から敬意を表したい。

第一巻が「人」、第二巻が「生」第三巻が「愛」として三部作になる予定と伺ったが是非早く残りの二部も拝見したい思いにかられるのは小生だけではないと思う。この本をページを追ってひもといてゆくも随所に十亀先生ならではの深い洞察にもとづいた独特の表現が散見され、さながら十亀先生にお会いして直接お話を伺っているような錯覚におちいる。論文に書かれたものよりも聴衆を前にして直接お話しされた講演の方がより

先生の人間味がにじみでていて親しみ易く感じられる。先生が生涯をかけて貫き通された自閉症児・者をはじめとする多くの障害者に接する姿勢は常に対等の立場に立った良き隣人であろうとすることであった。このことは先生の療育についての次の言葉によっても伺い知る事ができる。

すなわち「我々は彼らの見かけと、心の内面とのギャップを理解していくよう努めなければならぬ。彼らを見かけ通りに扱っていくと自閉症児は貧弱になってしまいうから、彼らの心の発達を考えると、相手の心がそこにあるものとして交わることが大切なのである。(中略)そういう意味で自閉症児を特別なものとして見ることを止めたとき、彼らがよく見えてくる」「私達はやはり、この子どもたちをなるべく普通の子どもと同じ可能性の中に生かしていく努力を払っていかなければならぬ」と思いますし、そのためには、ありとあらゆる工夫をしなければならぬと思います。」とのべておられるが、この考え方は生涯一貫してかわらない基本的な姿勢であったとおもわれる。

次に先生は自閉症の療育におけ

る医療の重要性を教育的治療と治療教育との違いとして述べておられ、ハピリテーション体系としての治療を重視された点も忘れてはならないとおもわれる。「私はやはり科学性を取り入れると同時に、特に発達期にあるアンバランスの大きな状況では、医学的な見地というものを常に導入しながら、子どもを詳しく観察し、その観察に従って指導していくということがぜひ必要であろうかと思えます。」では、ハピリテーション体系としての治療におけるゴールはどこにおくべきであろうか。その答えとして先生は、人間らしく生きることを、人を愛すること、働くこと、考えることの四つをあげている。ここに十亀イズムの真髄をみる事ができるように私には思われる。次の二部も第一部に優るとも劣らないものになることを確信してやまない。



## 『あさけ』からの

メッセージ

あさけ学園 奥野 宏二

あさけ学園の重度者比率は、82%を越えてしまった。しかもこれは、IQ51以上であればいかなる拡大解釈もできないという、精神薄弱者の判定基準にもつづいた精更相判定の結果である。自閉症の人達がこの基準に当てはまらないことは、彼等にかかわる人達の中では周知のことである。IQ150近くある人でも、かなり重度の行動障害や適応障害を示している。また措置費への加算を想定した重度の概念にも、かなりの食い違いが生ずる。例えば、今まで他の一般更生施設からの措置変更を何名か受け入れているが、「彼は判定上重度ではなかったが、他の最重度の人より手が掛かった。『あさけ』さんは、さぞかし大変でしょうね」と後で聞かされる。或いは初めから大変な人だと聞いていたのに、学園で受けてみるとそんなこともない。勿論、我々の施設で重症心身障害児を受け入れれば手が掛かると感じるだろうし、逆に重心施設では動き回る人達は手

が掛かるという意味で、このことを一概に論ずることはできないが、自閉症特有の問題を他の障害を基準に判定したり、処遇のための予算措置を行うこと自体に問題があると言えよう。ましてや『障害種別に拘らない制度や対策』に言及した研究報告等は、障害者処遇の実情や現場を知らないといしか言いようがない。

あさけ学園では、入浴、食事、その他の生活を20名単位で行えるよう配慮し、それぞれ7〜9名の職員を配慮し、20名単位で2名の泊まり体制をとっている。直接処遇に当たる職員の配置は、国の最低基準の約2倍である。単純計算を行えば、(現職員数50÷国基準29)×1=重度加算充当数6(重度10名で1名)×15となり、15名の人件費が法人努力に帰されている。経営的に言えば無謀なやり方としか言い様がないが、まさに障害者問題の谷間に位置した自閉症者も、十分な配慮と人手、或いは専門的な処遇により、一般更生施設以上の成果をあげられることが、この10年の取組みで明らかになったと考えている。

ノーマライゼーションの発想を当たり前に実践しようとするれば、

中重度者は更生援護、重度者は保護という二極分解の発想は過去のものとなり、我々はもはや後戻りできないところにまで踏み込んでしまっている。

しかしながら、10名以上の人件費を法人努力で埋めることはもはや限界に達しており、特に昨今の求人状況の中で初任給の大巾アップ、週40時間労働などが現実的な課題となれば、当たり前の試みを続けること自体が不可能となる。手前勝手な不遜な考えかもしれないが、あさけの職員は一般更生施設の数倍の苛酷な労働を行っていると思っている。彼等を施設職員としてとどめること自体に辛さを感じてしまう。

自閉症者施設を単に行き場のない人を保護する場にはしないという、極めて単純な取組みでさえ思うに任せない現実である。

自閉症児施設は制度化されても、者の施設の制度化が必要でない根拠がどこにあるのか知りたいものである。

## 第二ともえ学園

前岡 孝司

大人になった自閉症の施設として、第一種自閉症児施設ともえ学園の棟続きに、第二ともえ学園を併設して既に五年が経過しました。

施設種別は全く違い、措置する機関も児童相談所から福祉事務所になりましたが、入所する園生に変わりがあるわけではなく、それまで生活していた閉鎖的な児童施設の病棟から、生活空間を広くとり様々な備品、調度品に囲まれた開放的な更生施設に居を変えることになった五年前は、誰もが不安を覚えたことと思います。

確かに、児童施設を開設した頃の、あの破壊的な行動、自傷、他害、乱暴、不潔、こだわり、徘徊偏食、不眠等の問題行動はある程度減少していましたが、それなりの確信と期待をもって、環境の違う新しい生活場所へ移動した訳ですが、やはり何か問題行動が起こるのではないかと危惧したものです。

そういう期待と不安の中で成人の施設をスタートさせ、作業を柱



とした日課を作り、今日に至りましたが、幸いなことに目を見張るほどの大きな問題もなく過ごすことができました。このことは、職員はもとより、保護者の方にとっても大きな喜びであり、その理由が、日頃の療育の成果か、または、単に成人したから落ち着いたのかは別として、これからの励みとなりまた希望になっていると思えます。

しかしながらこの間生じた様々な小さな問題は、反社会的、非社会的なもので、施設だから大きな問題にならなかつたものも少なくありません。こういう現状を踏まえ、私たちはこれからも長い目で少しずつ社会参加を目指して努力しなければなりません。

現在、作業については椎茸栽培・石鹸製造、内職などを個々に応じて分担すると共に、より社会参加が可能になった六名が地域の企業や会社へ職場実習することが出来るようになりましたが、施設としてその通勤を援助することにも限界があり、次の新しい職場の開拓の支障になっています。

また、余暇の活用についても様々な取り組みを始めていますが、いかに個々の興味を引き出し、継

続することが出来るかが課題で、様々のメニューを繰り返し提供していますが、やはりすんなりとは受け入れられないで、この成果があらわれるのも何年か先だと思えます。ただ、色々な取り組み、思案があっても、限られた職員配置の中では窮屈で無理な点多々あり、その成果が半減してしまします。

もっと余裕をもって、ゆったりと取り組めばいいのですが、つい無理をして結果のための過程となり本来転倒している点もありますので、反省をして、過程を大事にし、やはり、これからもあせらず、休まず、根気よく、初心を忘れないようにし、最近マンネリ化しているようなのでこの投稿を機に気分を引き締めまた頑張りたと思います。

### 「全自者協」設立の流れ

社会福祉法人嬉泉

奥村 幸子

全国自閉症者施設連絡協議会が発足して、もう四年が経ちました。名称が長いから略称をどうしようか、というような話をしていたのは、つい先日だったような気がし

ますが、「全自者協」という発音にもすっきり慣れたこの頃です。設立の経過を御報告するには私は適任ではないのですが、私からみた経過を書いてみようと思えます。昭和61年、あさけ学園の、故十亀史郎先生を偲ぶ会で、十亀先生の、「自閉症児者の問題は、一施設の努力の範囲を超えるものだ。志を同じくする施設が手を結ばなければ」という御遺志をうけて、あさけ学園からの呼びかけがあったことがきっかけになったと伺っています。

それをうけて、昭和62年7月、東京の子どもの城で行われた、全自者協の設立準備会は、第二ともえ学園の皆さんがあさけ学園と共にする下さり、16施設が集まりました。自分の目の前の仕事に一生懸命と取り組むだけで精一杯だった私は、私の気付かない所で、想いを同じくする仲間がこんなに沢山いたのだという新鮮な思いを味わいました。しかし、想いは同じでも、それぞれの立場や事情で、施設設立の状況の違いもあって、すべての点で足並みが揃うことが出来ず、引続き開かれた、設立総会に正式に参加したのは8施設でした。会則や、研修を兼ねて年一回

総会を会員施設持回りで開くことなどが決り、小さいけれど志の高い全自者協が誕生いたしました。初代会長は第二ともえ学園の武村一郎先生が、体調が万全でないにも拘らずお引受け下さったことが、どんなにか会の第一歩をスムーズに踏み出す上で力強かったことか。思いもかけない御逝去に会って、先生のお気持を無にしないよう受けついでいく責任を私達は負っているのだと思っています。

二代会長、社会福祉法人嬉泉、常務理事石井哲夫（袖ヶ浦ひかりの学園）、三代会長、社会福祉法人檜の里理事長石丸晃子（あさけ学園）と引きつがれ、現在に至っており、総会も、袖ヶ浦ひかりの学園、第二ともえ学園、あさけ学園と重ねて来しました。会員施設も20となり、今後は、日本自閉症協会を初めとする諸団体とも手を携え、又厚生省や各地の行政機関の方々の理解とお力添えをいただきながら、自閉症者の幸せを追求する施設運営と処遇の充実に向けて会員の施設が力を揃えていけることを希っています。

## 袖ヶ浦ひかりの学園

友田 篤

学園の紹介に先立ち、学園を取りまく地域の様子について少しお話ししたいと思います。

ここの袖ヶ浦は、東京湾に沿った海浜地帯に、石油化学工業を中心とした工業地帯が開け、一方には緑豊かな田野が広がる田園都市であります。人口は五万四千余人、この四月に千葉県下二十九番目の市政が施行されました。市では、二十九を「フク」と読み替え、「フク市」の町、福祉都市宣言を目指しています。この言葉通り、市内には、六五〇名定員の精神薄弱児・者施設、四五〇名定員の授産施設を併設した精神薄弱児・者施設、特別養護老人ホーム二ヶ所(総定員二四〇名余り)、さらに市立の福祉作業所、それに私たちの袖ヶ浦のびろ学園、ひかりの学園の百名を加えますと、八ヶ所の障害児者関係施設があり、千五百人近い障害者が暮らしていることになりました。三年程前から、これに保育所、里親会、職親会の代表が加わり、「袖ヶ浦市福祉施設連

絡協議会」が、社会福祉協議会の後援で作られ、地域福祉の向上を目指して活動が行われています。講演の開催や互いの施設を理解するための見学会など、地道な活動を続けています。

袖ヶ浦ひかりの学園は、昭和五九年四月に開設した精神薄弱者更生施設で、同一敷地内に第二種自閉症児施設袖ヶ浦のびろ学園があり、緊密な連携のもとに療育指導が行われています。定員は四〇名で、全員が自閉症者です。

療育活動は、「生活ルーム」と「職業ルーム」の二つに分けて構成し取り組んでおります。

①生活ルーム  
一〇名単位に四つのグループを編成し、そこでできる限りの家庭的個別的な生活ができるように工夫しております。

生活ルームの目標は、利用者の情緒を回復し自我の発達を援助することにあります。

生活の流れは、それぞれの時間は設定されていますが全体的にゆとりをもって運用されています。午前七時起床、一〇時から作業で、この間に洗面・着替え、マラソン、朝食、掃除、植物の手入れやラジオ体操、あるいはグループ毎のミ

ーティングなどが組み込まれています。さらに、生活ルームでは、利用者が主体的意欲的に暮らせるようなさまざまな状況を用意されています。食事はカフェテリア方式(朝食はバイキング式)喫茶室の開店や買物ドライブ、毎夕のカラオケ大会などであり、個別に趣味や興味を生かせるように時間や場所の保障や条件を整えています。(ピアノ練習、生け花教室、手芸、クッキー作り、読書など)

②職業ルーム  
職業ルームの考え方は、利用者の自発的な作業指導を治療教育の一環として位置づけ、選択に基づいて主体的な参加を促していく「選択的作業指導」です。作業時間は、午前一〇時から一二時と午後二時から四時ですが、利用者とその作業内容によってはこれを大幅に越える者もいます。

作業種目は、製パン、陶芸、機織、カンパニー(各種請負仕事)、ひかりの牧場(農作業)、養鶏があり、各々の作業場は作業指導棟の中かその周辺にあつて、全ての作業状況が見通せるようになっていのです。こうして、利用者が個々に作業種目が選べるようになっていて、各々の作業においても

画一的な作業内容ではなく、一人の興味や意欲・創造性が活かされるように配慮されています。

さらに、こうした種目に加えて、利用者の社会化を積極的に進めていく指導として、園内での実習(食堂・洗濯室・喫茶室)、販売作業——地域のスーパー店頭や駅構内、市役所ロビーあるいは地域を巡回してパン・卵・野菜・やきいもなどを販売する活動、さらには近隣の事業所での実習や就職開拓を進めております。

③グループホーム蔵波台の家  
平成元年九月、袖ヶ浦ひかりの学園がバックアップ施設となって市内の住宅街の一角に開設しました。現在四名(一名移行中)の入居者があり、学園の各々の作業場に通り指導を受けています。

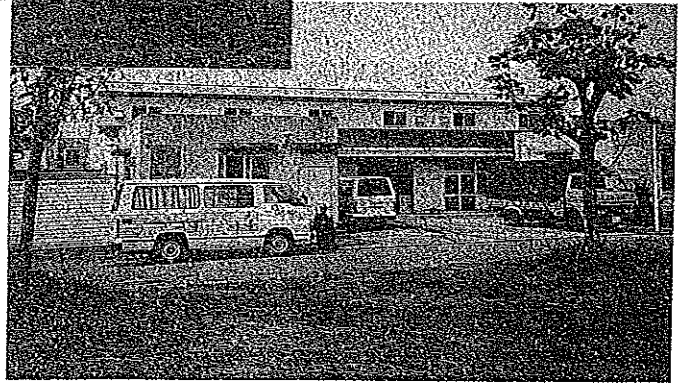
④地域との交流  
これまで販売作業やバザーを通して地域との交流を図ってきましたが、昨年より地域で開催される様々な行事やイベントに積極的に参加するようになりました。

今後の課題としては、これまでの社会参加活動の延長線上に立つてどのように社会につないでいくのか、地域生活や地域との交流あるいは地域サービスをどのように



展開していくかという点にあると思われます。

市内には、先に紹介したように、大企業はいくつもありますが、学園の利用者を気軽に受け入れてくれるような小規模な「仕事場」がほとんどなく、園外に職を求めることが困難な状況にあります。利用者の就労の道を広げる努力は今後も続けていかなければなりません。



### 情報コーナー

- 第二回くさぶえ祭  
日時：平成三年十一月十七日(日)  
十一：〇〇～十四：〇〇  
場所：川崎市くさぶえの家  
内容：バザー、模擬店、パネル展示ほか
- 第三回くさぶえの家講演会  
日時：平成四年二月七日(金)

- 九州地区自閉症施設連絡協議会  
三月十六日、志摩学園五周年記念式典が挙行され、各施設長が集った折りに以下をとり決めた。
- 九州地区においては、年々自閉症施設が増えている。また、中央から遠いので情報が十分届かない。このため、施設相互の連絡を密にして情報を交換し、療育の実績をあげるために九州地区自閉症施設連絡協議会を発足する。
- 会長：志摩学園長  
福会長：塚脇学園長、三気の里園長  
委員：各園二名(企画運営)  
会合：年二回  
問い合わせ：塚脇学園  
〇九九五(四八)二七七六

- 合同研修会  
北海道で自閉症者福祉の先駆的役割を担っている石山センターと厚田はまなす園では、三年前より両園合同による施設外研修を実施して。内容は、  
①各園のケース等を再度合同研修会で検討、処遇効果の測定  
②外部講師を招き新しい知識、技術を体得するための講演会  
③職員同士の交流を通し情報交換と親睦  
今年度は十一月に開催を予定している。福祉系大学の心理学教授を招き、私たちが福祉現場でいかに働いていくべきか、その意識面を様々な角度から考えたいと考えている。
- 問い合わせ：石山センター  
館林先生  
〇一一(五九二)一九一一
- 神奈川県自閉症療育実践研究会  
県内にはくさぶえの家、東やまた工房の二か所の自閉症の通所更生施設がある。居住施設も予定されている。この状況で県福祉部より「県内で自閉症療育について定期的に検討し合える会合を持っては。」との示唆があり、自閉症療育等を共通に認

- 十：〇〇～十二：〇〇  
場所：川崎市中小企業婦人会館  
テーマ：人間らしい生き方を求めて  
講師：石丸晃子先生  
(福) 檜の里理事長  
問い合わせ：川崎市くさぶえの家 丸山先生  
〇四四(八八八)六六九二
- 九州地区自閉症施設連絡協議会  
三月十六日、志摩学園五周年記念式典が挙行され、各施設長が集った折りに以下をとり決めた。
- 九州地区においては、年々自閉症施設が増えている。また、中央から遠いので情報が十分届かない。このため、施設相互の連絡を密にして情報を交換し、療育の実績をあげるために九州地区自閉症施設連絡協議会を発足する。
- 会長：志摩学園長  
福会長：塚脇学園長、三気の里園長  
委員：各園二名(企画運営)  
会合：年二回  
問い合わせ：塚脇学園  
〇九九五(四八)二七七六
- 合同研修会  
北海道で自閉症者福祉の先駆的役割を担っている石山センターと厚田はまなす園では、三年前より両園合同による施設外研修を実施して。内容は、  
①各園のケース等を再度合同研修会で検討、処遇効果の測定  
②外部講師を招き新しい知識、技術を体得するための講演会  
③職員同士の交流を通し情報交換と親睦  
今年度は十一月に開催を予定している。福祉系大学の心理学教授を招き、私たちが福祉現場でいかに働いていくべきか、その意識面を様々な角度から考えたいと考えている。
- 問い合わせ：石山センター  
館林先生  
〇一一(五九二)一九一一
- 神奈川県自閉症療育実践研究会  
県内にはくさぶえの家、東やまた工房の二か所の自閉症の通所更生施設がある。居住施設も予定されている。この状況で県福祉部より「県内で自閉症療育について定期的に検討し合える会合を持っては。」との示唆があり、自閉症療育等を共通に認

識し合い、学習し合える人的関係を作り、県内の自閉症福祉を考える為のベースとしたいと考え、発足に踏み切った。人的ネットワークを作るだけでなく、各施設の実践の積み重ねを相互指摘し、成果と問題点を相互にフランクに話し合い、自閉症処遇を検討していくことを目的としている。今後、学校教員、福祉事務所ケースワーカー、医療機関等をも組織し、幅広く自閉症者の社会生活を広げていく上で問題点と、療育の方向や援助のあり方等を専門的に研究していきたい。当面は精神薄弱者援護施設の中堅職員を中心に会を進めていきたい。

小林先生

○四五(五九一)二七二八

○りんどう祭(文化祭)

日時:平成三年十一月三日

九:〇〇〇十五:〇〇

場所:うさか寮

内容:パザール、作品販売、アトラクションほか

○作品展示会

日時:平成三年十一月八日、三十日

場所:富山市絵曲輪えうがわ

ギャラリー・シオン

内容:陶芸、漆器、手芸ほか

○のみの市

日時:毎月第一日曜日

場所:富山県護国神社

作品/農作物販売でのみの市に参加している。

○富山県自閉症児研究協議会

日時:毎月第四水曜日

十四:〇〇〇十六:〇〇

場所:富山県精神保健センター  
内容:事例研究、施設見学、講演ほか

問い合わせ:うさか寮 黒田先生

○七六四(三六)〇二七〇

○はぎの郷のセミナー

ささやかなセミナーを隔月に実施している。参加ははぎの郷仲間、職員、保護者を中心だが、話題によっては県内在宅自閉症児の家族が多く参加することもある。長続きさせるため気さくな雰囲気大切にしている。対外的案内は特にしていない。これ迄の講演者は、灰谷健次郎さん(児童文学作家)、辻幸江さん(精神科医)、渡辺勸持さん(心理学)ほか。今年度後半も5、6回を実施予定。講師に、

北村圭三さん(神戸女学院)、古川宇一さん(北海道教育大)、加藤孝正さん(同朋大学)を予定。関心のある方、問い合わせ下さい。

問い合わせ:中島先生

○七六二(八八)〇三三九

○第八回自閉症児治療教育実践講座

日時:平成四年二月十四日、十五日

場所:袖ヶ浦ひかりののびろ学園

テーマ:自閉症児療育において何を大切にするかー青年期/成人期療育の視点から

内容:片倉信夫先生(精神発達障害指導教育会)奥野宏二先生(あさけ学園)ほかの講演と実践指導

○作品展示会(東京ガス展)

日時:平成三年十月三十一日、十一月六日

場所:木更津そごうデパート  
催事場  
陶芸、はたおり等の作品展示と学園紹介

問い合わせ:袖ヶ浦のびろ/ひかりの学園

○四三八(六二)九二二一

### 新会員施設

京北やまぐにの郷(定員50名)  
設置母体・(社福)京都杉の木会  
所在地・京都府北桑田郡京北町大字大野小字葛浦ヶ回五十番地の二  
☎(〇七七二五)三・〇五七一  
FAX(〇七七二五)三・〇三七二  
理事長・尾谷大造/施設長・松上利男/本会連絡者・松上利男

めぐぎ園(定員30名)  
設置母体・(社福)萌葱の郷  
所在地・大分県大野郡犬飼町大字下津尾四三五五一〇/☎(〇九七五)七八・〇八一八 FAX(〇九七五)七八・〇八一八  
理事長・高田哲治/施設長・五十嵐康郎/本会連絡者・五十嵐康郎

### 編集後記

大会開催中にこの会報を皆様にお渡しすることができそうでホッとしております。原稿やたくさん情報をお寄せ下さいました皆様に感謝申し上げます。石丸会長のお言葉のように、この会報が皆様をつなぐ役目を果たせたらと念じております。

この会報はまだ正式の名称が決っておりません。皆様のご意見をいただき、名前を付けたいと思っております。事務局宛にご意見をお寄せ下さい。